

## 小規模大学における学生支援の試み（４）

－奈良産業大学学生相談室の活動（平成 24 年度）から－

菅 徹  
Toru Kan

### 1. はじめに

学生支援センターが開設されて三年が経過した。平成 22 年度に学生支援センターの施設設備は整った。<sup>1)</sup>次には、この施設の有効活用が焦点になってくる。その意味では年度当初より 4 人の外部講師が雇用されたことは、本学のリメディアル教育の新たな出発となった。

第二には、本学教職員に対する定期学生相談研修会及び、筆者が受講した研修会の内容を記す。新しい知見の吸収は、学生相談活動の血肉となっているので、その内容を紹介する。

第三には、学生相談活動の枠組みを「学生支援の三階層モデル」（独立行政法人日本学生支援機構，2007）<sup>2)</sup> 本学の学生相談のモデルとして、努力を積み重ねてきたことである。しかしながら、枠組みの完成および内容の充実に関しては、はなはだ不十分である。その理由の一つに、学生を囲む社会状況の変化がある。特にリーマン・ショック以来の景気動向は学生の雇用に著しい影響を及ぼしている。学生は三年生から就職ガイダンス等の就労準備に直面する。しかし、これまでのところ、障がい学生の多くが就職ガイダンスに継続して、参加することができない状態にある。これが四年生に至ると就職活動を止めてしまうことになる。その対応について述べる。

第四には、本学の学生相談活動は 4 年を経過した。毎年、取り組みは進化しているが、効果のある取り組みになっているかを検討する。

### 2. 平成 24 年度の学生相談活動概要

#### 2. 1 個別の学生相談

##### 2. 1. 1 学生相談実施学生の「実人数」「延べ面接回数」（2012.4～2013.3）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
①	1	2	2	6		1	4	1	2	3	1	1	24
②	1												1
③							1						1
④		3	1										4
⑤		1	1										2
⑥							3	1	3	2			9
⑦	3		4	3	6								16
⑧		1		2				1				1	5
⑨								1					1
⑩		1											1
⑪						1							1
合計	5	8	8	11	6	2	8	4	5	5	1	2	65
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
保護者		1	2	4		2						1	10
教職員	1	2			1	3	1	1	1		1		11

表 2-1 月別面接延べ人数及び面接回数

表2-1は学生・保護者への個別相談件数・教職員に対するコンサルテーションの実数である。まず、学生への個別面接について概略を述べる。表の左縦軸①～⑪は筆者による個別面接の人数である。この中で、⑤・⑨・⑩以外は特別な支援を要する学生（卒業生一人含む）である。しかし、ここに示した11名は前年度<sup>1)</sup>と違い、「相談内容の内訳」（表2-2）にあるような明確な区分ができる。昨年の本稿では、「学年の推移によって流動し、複合的な問題へと発展していく可能性がある。学生個々人も成長・変化しているのである。」としている。これまで、数人の学生を経年観察してきた。学生の「成長・変化」を感じながらも、それが、本人たちが希望する方向性に沿っているか、定かではない。

	勉強・進路	心理・適応	その他	
実人数	2	8	1	11
延べ回数	3	61	1	65

表2-2 相談内容の内訳

例えば、彼らは、今までにアルバイトの経験がなかった。そこで、筆者はアルバイトを体験させようと、4人の学生に対して面接の練習を提案した。同意したので、週一回、四週にわたって実施した。目標は、各学生の居住地の郵便局での年末年始のアルバイトである。面接試験の結果は、一人合格であった。不合格だった三人には、翌年の面接試験に再び、挑戦するよう声をかけた。しかし三人とも断ってきた。この出来事を通じて、他の学生の中にも、これまでにアルバイトの経験が一度もない学生がいることもわかってきた。このような状況を考えると、三年生で始まる、就職ガイダンスに参加できるかどうか、はなはだ心もとない状況である。

表2-2の「心理・適応」の項目では実人数八名、延べ面接回数61回と、個人面接のほとんどを占めている。特別な支援を要する学生が増加してきたことについては、予想されたことで、あまり驚くことはないと思っている。今後は、個人別・縦断的に成長・変化の様子を捉えることを通して、卒業までの支援効果を高める必要がある。

### 3. 学生教育相談研修

#### 3.1 学生相談定期研修会（学生支援センター主催） 毎月第2火曜日の2限目（会場：1号館 第3会議室）

##### 第1回 「学生相談とは」（大学での相談活動について）（講義）（6／19）

参加人数：教員（6）名 事務職員（3）名

##### ①学生支援モデル

##### ②学生支援体制

##### ③「学生支援シート」の作成と運用

1. 要支援学生への対応を教職員のみでやっていくのは、今後ますます難しくなっていくと思われます。ノートテイキングの話が出ていましたが、そのほかにも学生を活用する方向で検討していく必要を感じています。（要望）学生相談を利用した学生の感想などを差し支えない範囲でお知らせいただけたらと思います。（教員・男性）
2. 本学の具体的な取り組みや情報の共有ができたのは有意義でした。プライバシーに配慮しつつ、本学の具体的な学生について、どのように問題が解決に向かったのか、向かわなかったのかを提示していただけると、より身近に感じられますし、参加してよかったと思えるのではないのでしょうか。学生援助シートが今後、どうなるか、気がかりです。（教員・男性）
3. つい、目の前の学生の問題にのみに注意が行きがちですが、生活サイクルや問題の深刻度、支援システムの区分といった大きな枠組みで、客観的に考えることも必要ですね。参考になりました。とはいえ、やはり本学の学生が抱える、

具体的な悩みが気になりますので、個人情報に配慮した上で、実際の事例研究を取り上げていただければうれいす。（教員・女性）

4. 今年度最初の研修会お疲れ様でした。今回の研修会で、昨年度を振り返ったところ、多様な学生の一人一人に対して、学生が抱えている問題がよく見えてきたように感じました。また、抱えている問題が、すぐには解決するものでもなく、大学としては、支援が必要な学生に対して、支援をし続けて、卒業していただく事が重要なのか、抱えた問題に対する対応力をつけて卒業させることが重要なのか。今後の支援を考えるならば、昨年までに集まった、十数人の要支援学生に対して、今年は何のような目標を立てて、どう、支援するかの方針などを学部で共有して、見守る必要があるのではないかと感じました。また、大学関係者全員の見守りが必要であるのだから、もっと多くの方が、関心を持って、研修会に参加してくれるような方策を考える必要があると思いました。（教員・女性）

**筆者のコメント**

本年度最初の研修会であった。2011年度までに積み上げてきた学生相談研修会の内容をリセットし、新しい知見を含めて実施していこうと考えた。特に4. にあるように、前年度の研修会で取り上げた内容が、学内では、「ケース会議」や「学生援助シート」として結実している。

**第2回 「チーム援助による学生支援センター活動の実際」**

－発達障がい学生への支援からユニバーサルデザインへ－（8／8）

講師 プール学院大学 国際文化学部 子ども教育学科 教授 学生支援センター長

中村 健氏（講義） 参加人数：教員（30）名 事務職員（14）名

- 今回特に、チーム支援やユニバーサル支援について、大変興味ある講演でした。本学でも、これを取り入れるような仕組みを作っていきたいと思います。具体的にどのように仕組み作りをしていけばいいのか、また、ご指導、ご提案をよろしく願います。（教員・女性）
- GPということで何か、特別な取り組みかと思った。しかし、手間はかかるが、どの大学でも可能な取り組みを地道に愚直に実践していくことが、大切であると思いました。（教員・男性）
- 学生支援は教職員の情報の共有、連携が必要、大切なことであると、この研修会を通して、改めて感じました。（事務職員・男性）
- 授業のユニバーサルデザインが、大変勉強になりました。集中力が続かない等、授業の工夫に直面しておりましたので。ただ何かと責任転嫁する学生も多いため、グループワークがうまくいか不安です。（教員・女性）
- 「授業のユニバーサルデザイン」は、発達障害の学生のみならず、本学の多くの学生に当てはまる状況にあり、是非授業に取り入れたいと思いました。本学では、学生に関するすべてのこと（連絡・相談・指導等）がアドバイザーに集中しすぎており、負担が大きいのと思っています。チーム援助というシステムが本学にも根付き、機能することを願います。（教員・女性）
- 近年の大学教育において、発達障害のある学生に対するケアの大切さは、日々痛感するところである。個人的には、パワーポイントを用いた授業のどういったところが、視覚支援という観点から、高い効果を得られるのか、具体例がほしかった。特に、アニメーション効果等は多用すると、むしろ集中力を散逸させやすいと聞いているので、そういった点で、発達障害の学生相手に対する使い方として、留意すべき点がないか、気になるところだ。（教員・男性）
- 個々の学生の特性を知り、環境を整える必要性がわかった。特別な高度な専門知識がなくても、できることがあるかもしれない。発達障害のない学生については、生活習慣との関係もわかればよいと考える。（教員・男性）
- 今、大学においては、すごくサポート体制が整ってきたと思いますが、高校においては、どんな状況なのでしょう？（事務職員・男性）
- ゼミ生の中には、対人、行動面での問題を抱えている学生や、それに加えて学習面での問題のある学生もいる。個々の学生に応じた解決策を考えていかなければなりません。複数の組織が連携して、取り組むことが重要と認識しました。（教員・男性）

**筆者のコメント**

外部の講師として、お招きした中村先生の講演会には、44名の教職員が参加した。4. 5. の「授業のユニバーサルデザイン」については、障がい学生に対してだけでなく、一般学生に視野が向けられているため、自らの授業方法に関して改良を重ねている先生方にとっては、本学のFD活動の在り方と関連して、教職員に刺激となった。

**第3回 「全国の大学における障がい学生に対する支援と本学の現状」**（講義とDVD視聴）（10／9）

参加人数：教員（11）名 事務職員（12）名

- ①発達障がいに止まらず、視覚障がい、聴覚・言語障がい、肢体不自由、病弱・虚弱などへのサポート体制
- ②個々の学生に対するケース会議（事例研究会）やチーム支援体制など、各大学の取り組み紹介。
- ③立命館大学の取り組み例のDVD視聴。
1. 高校現場では、以前から障害のある生徒を受け入れ、担任を中心として、生徒のニーズに合わせた支援体制を組んでいる。これらの生徒は、大学などへの進学を目指しており、必ず、大学としても対応しなければならないのは明らかである。ただ、高校と違って、「担任制」が必ずしも十分な機能を果たしていないので、ケース会議をするにしても各事務から担当者が集まっても、アドバイザーが意識を持ち、その中心にならないと、責任を持って面倒を見ていけないのではないかと心配がある。（事務職員・男性）
2. 共生社会の定義の中で、学生支援担当者、チーム支援は必要だと思う。明確な組織が必要である。（事務職員・男性）
3. 組織的な仕組みの構築を進めることが重要であることがわかった。日本では、大学における障害学生支援のために、法律上の枠組み、ガイドラインが未発達のようなので、今後の進め方は、これらを見極めながらやっていく必要があると思う。（事務職員・男性）
4. 障害学生を受け入れるためには、施設面、人的サポートの費用などの検討が必要で、すべての教育機関で準備する

- ことは難しいと思われる。また、身体障害者より、発達障害者のサポート対応は、一般教職員では難しい。法人全体の取り組みが必要である。(教員・男性)
5. 立命館大学のDVDを学生に見せる機会を設けてもいいのではと思います。学生のサポートが、いかに必要かということ、医療補助を受けながらも大学教育を受けたいという姿勢を健常なのに、出席もしない学生に働きかけてはと思います。(教員・男性)
  6. もう少し、具体的な事例や支援内容がわからないと、イメージが持てませんが、たまたま障害学生と関わるようになった教職員や周囲の学生が、場当たり的に対応するよりも、組織として対応する仕組みを整えておく、必要はあると思います。障害学生の支援に特化することなく、情報センター関係の授業のアシスタントやオープンキャンパスの手伝い等を含めて、学生のボランティア組織、または有償の人材派遣組織があればいいかと思えます。(教員・男性)
  7. 障害学生を受け入れる場合、施設の整備と職員の専門性も必要と思われるので、最低限の内容を新大学に提案すべきだと思います。(事務職員・女性)
  8. かつて、聴覚障害の学生に対して、本学でも学生サポート体制を組み、ノートテイクなどの補助を実施していた。その意味で本学も経験がある。当時、学生数が多く、サポート学生を見つけやすい状況だったことを考えると、現状で対応できるのか不安が残る。少数学生の大学でもサポートを実現できる、うまい仕掛けがあればよいのだが。(教員・男性)
  9. 「共生社会」の実現のためには、全教職員が協力して障害学生を支援できる体制を整えていく必要があると思います。今後も継続して、このような研修会に参加して、理解を深めていきたいと思えます。(事務職員・女性)
  10. 立命館大学の組織的な取り組みには驚きで、本学でどれだけできるのか。(事務職員・男性)
  11. 障害学生支援を初めて知り、勉強になりました。(事務職員・男性)
  12. 障害学生のニーズに応えるため、本学で体制を整えるには課題が多くあると感じた。本学と同規模の大学例を提示していただければ改めて、課題を克服する鍵が見つかるようにも感じた。(教員・男性)
  13. 不登校の学生に対する支援を、どうするかについて迷っています。(いろいろなタイプの学生がいるようなので)(教員・男性)
  14. 障害者支援は留学生への授業に対して通じるものがあり、すぐにでも、本学でも実践すべきだと思います。発達障害への対応先進例を教えてください。特に、手帳を持たない学生にどう、対応するか知りたいです。(教員・男性)
  15. 「できることから取り組む」との結論に、本学でできることがどれくらいあるだろうかと思いましたが、菅先生の最後の話で、少し安心しました。(教員・男性)

#### 筆者のコメント

立命館大学のDVDは、わずか10分ほどの広報活動用のものである。しかし、他大学の実践として、身体障がいや発達障がいに対する取り組みに興味を喚起したと思われる。また、本学の新大学施設設備と重ね合わせて視聴されたとも考えられる。

#### 第4回 発達障がいのある学生の諸問題（講義）（12／18）

参加人数：教員（6）名 事務職員（3）名

①発達（アンバランス）障がいとはどんな問題か？

②就労・学業・生活等具体的支援

1. 最初に見せていただいたVTRは、実際に障害を持っている方と生活している方の接し方などがあり、たいへん参考になりました。(事務職員・女性)
2. VTRを見ることによって、発達障害を持った人の困り具合、家族の対応の仕方が具体的に見られたので、わかりやすく、大変よかった。大学でのチーム支援の準備だけでも、かなり大変な事がわかったので4月からの開始に向けて、何から手をつけて準備を始めるのかなど、今後の進め方についてのご指導をよろしくお願いします。(教員・女性)
3. 新大学での対応が、どのようになされているか？一般教職員の理解は、まだまだ足りない。(事務職員・男性)
4. 「片づけられない人」に対して、「ありのままを受け入れる」のも必要であるが、可能であれば「効果的なやり方を伝える」のが、社会生活を送る本人のためにもいいのではないかと思った。(教員・男性)

#### 筆者のコメント

筆者は毎年11月、東京で行われる全国学生相談研修会に参加している。その際、分科会講師の高橋知音(信州大学)氏から紹介があった。それは、信州大学コンソーシアムでの、「発達障害のある大学生の立場から」と題した笹森理絵さんが語られた事例である。その語り口は当事者ならではの、実に含蓄のある日常生活、職場での活躍内容であった。参加者は、身体障がいや発達障がいに対する取り組みを新大学施設設備と重ね合わせて視聴されたものと思われる。

## 第5回 「チーム支援会議の実際」（講義）（2／12）

参加人数：教員（14）名 事務職員（7）名

① “解決志向ブリーフセラピー” によるカウンセリング方法論

② 学生のH先生の事例検討（ケース会議）

③ 事例 VTR の視聴

1. 気になる学生を組織で支援できる体制がとれて、自分だけで悩まず済みそうですが、対応する先生の負担が心配にもなります。（教員・男性）
2. カウンセラーのビデオが大変参考になりました。相談者のプラス面を数値化することで、前向きにする点は、今後の指導に役立てたい。（教員・男性）
3. 今回のケースを聞くことによって、この位の気になる学生は、自分の身の回りに非常に多いことに気づきました。今後、菅先生のところに、ご相談に行くことが多いと思いますが、よろしくをお願いします。（教員・女性）
4. 事例発表については、当研修会参加者間で個人名を出して、参加者共通の問題とし、その事例学生を、全員で見守る体制を構築するように努力すべきである。（教員・男性）
5. 学生の様子を客観的に評価するのは、かなり難しい作業になると思う。（教員・男性）
6. チーム支援会議がどのように行われるのか、イメージがつかめた。いろいろと相談することがあるかと思いたすのでよろしくをお願いします。（教員・男性）
7. 情報の重要性を改めて学びました。この情報を元に、早く対応方法を確立して、ベストな学生生活と将来を導けるように目指したいと思いました。今回のH先生と同じような学生がいるので、研修会中にいろいろと考えさせられました。可能ならば、話し合い以外でも、対応できるようにになりたいと思います。（教員・男性）
8. 大変参考になり、ありがとうございました。気になる学生のレベルが人によって違う可能性があります。統一は難しいですが、ある程度の基準があれば、わかりやすいと思います。（事務職員・男性）
9. ケース会議の実例を聞かせていただいて、漠然と「気になる学生」のデータが、具体的な側面に分類されて、わかりやすくなることを感じました。気になるのは、やはりアドバイザー以外の教職員からの声をどうやって吸い上げていくかですね。自主的な報告を待つだけでなく、例えば具体的な学生の名前を挙げて「この学生についての情報募集」のような呼びかけをすれば、「そういえば授業で…」のような声が上がってきやすいかとも思います。（教員・女性）
10. シートへの入力をした者として、なかなか同時入力で、正確に行うことは、難しいですね。Mさんの補助があってもやっとなりました。小さいPCでは打ちにくいので、ケース会議入力専用のPCを用意して、会場は、支援センター長室やカウンセリング室を使う必要があると思われる。（事務職員・男性）
11. どこまでケース会議にあげるべきか、従来通り個別に対応すれば、それでよいのか。なかなか判断に迷うので、個人情報に留意しつつ「こういう事例が、現在会議に挙がっている。類似の事例があれば寄せられたい」と教授会で紹介してもよいのではないかと。また、留学生について、国際交流センターと調整すべき。「留学生は、この会議では扱わない」等と勝手な判断が、どこかで働く可能性。（教員・男性）

## 筆者のコメント

今回は、「チーム支援会議」の実際を研修してもらった。H先生の「気になる学生」事例を題材にして、いかに短時間で「学生援助シート」の内容を埋めていくかに焦点をあてた。その方法論が解決志向アプローチである。参加された教職員にはその過程を体験してもらった。このことによって、支援対象学生への関わり方を疑似体験していただいた。事実、9. のような反応を頂戴した。また、11. には、「留学生」について懸念が示された。学生は全員が学生支援の対象である。対応が変わることはない。むしろ、「留学生」の場合は異文化カウンセリングについての理解がなされなければならないと考えられる。

## 3. 2 本大学以外での、学生教育相談研修会参加

(1) 「平成24年度障害学生支援研修会」〔理解・実践プログラム〕 主催 日本学生支援機構

日時：平成24年8月21日（火）～22日（水）10：00分～17：30 会場：大阪府立労働センター エル・大阪

<1日目>①障害学生支援に関する基本的な考え方（広島大学）②障害学生のニーズ（広島大学）③支援の流れと教職員の役割（山口大学）④支援内容の決定と相談体制（大阪大学）

<2日目>⑤授業に関する支援方法（同志社大学）⑥支援者の育成（広島大学）⑦卒業生による支援利用経験と評価（広島・筑波・富山の各大学）二日間、息もつかせぬ盛り沢山の研修内容であった。非常に考えられた内容で、すぐにでも学生支援に使用できるように工夫されていた。

(2) 「平成 24 年度障害学生修学支援事例研究会」 主催 日本学生支援機構

日時：平成 24 年 8 月 31 日（金）10：00～16：55 会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

テーマ：「発達障害学生の修学支援」 全参加者を 10 グループに分けて、各グループで共通事例を検討した。

分科会 1: 共通事例の課題解決のための検討：筆者はグループ 1 に参加した。ファシリテーターは、齋藤清二先生（富山大学）である。3 グループに分かれて、事例について、熱心な討論がなされた。

分科会 2: 自由検討事例の課題解決のための検討（午後）。初めに事例の内容の説明。その内容に基づいて、グループごとに意見交換をおこなった。まとめとして、支援者が、対象学生との間に信頼関係を構築することが、何にもまして重要なことであるとの意見の一致を見た。

(3) 第 50 回全国学生相談研修会 主催 日本学生相談学会

日時：平成 24 年 11 月 18 日（日）～11 月 20 日（火） 会場：東京国際フォーラム

筆者は、分科会 B コース：B9 の「発達障害学生への支援：アセスメントから支援計画へ」のコースを選んだ。参加者 40 名、講師は高橋知音先生（信州大学）の元、三日間で延べ 10 時間のセッションを行った。

<1 日目> 「学生理解のためのアセスメント」と題して、発達障害の種類とその特徴について説明を受けた。グループごとのディスカッションでは、大学生活での①「社会的障壁」、②大学での「居場所」、③自由度が高い学習課題への適応の問題等、熱心に話し合われた。

<2 日目> テーマ：「支援をデザインする」ということで、高校までと大学での支援の違いや「合理的配慮」の具体例を通して、個別の支援計画を作った。この内容はすでに本学で、「学生援助シート」として、活用されているのでイメージしやすく、活発な論議となった。

<3 日目> あらかじめ参加者から提出されていた 5 件の事例について、参加者が興味を持った事例を選択して、グループを形成して、具体的な支援計画を、話し合いながら作った。

以上、簡単に 3 日間の分科会を振り返ると、他大学の相談担当者との共同作業は大変参考になった。これを奈良産業大の学生相談にどのように展開していくかが鍵になる。

## 4. 学生に対する全学的支援組織の構築について

### 4.1 学生支援組織構築の目的

在学生すべてを対象とするユニバーサルスタンダードを目指す支援である。すべての学生に、「学生支援の 3 階層モデル」に則した支援を行う。その上で、一人一人の自己実現を応援する。

#### (1) 「気になる学生」に関する情報収集と集約系統図

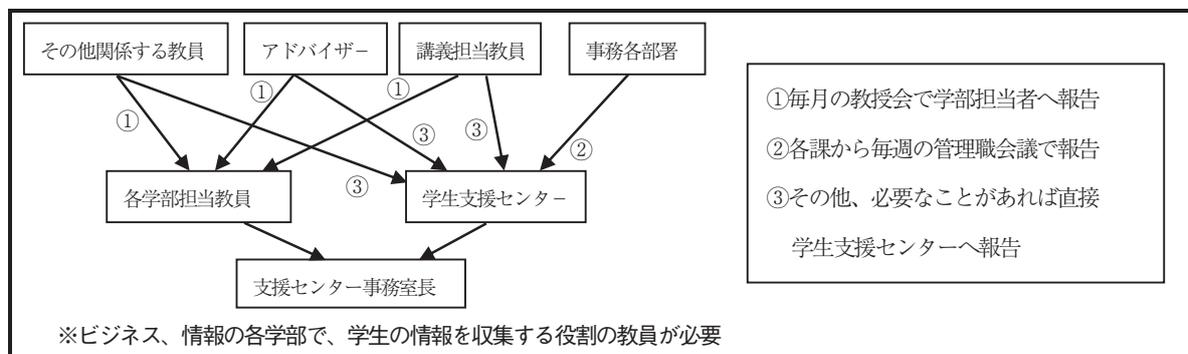


図 4-1 「気になる学生」に関する情報収集と集約系統図

(2) チーム支援会議（ケース会議・事例研究会）の実施

- ・支援を必要とする学生ごとに次の会議を組織して実施する。
- ・会議メンバーや人数はケースによって異なり、カウンセラーと相談の上でインターカーが招集連絡する。

参加  
メンバー

- ①当該学生のアドバイザー
- ②本学カウンセラー（菅）・インターカー（松本）
- ③当該学生について情報をよく知っていて活用できる教職員

内容と  
時間

- ・個人別に下記の「学生援助シート」を作成して情報を蓄積。
- ・保管は学生支援センター → 状況の変化 → 援助シート更新のための会議を招集
- ・各回の会議は、昼休み等を利用して、1 ケース 30 分程度

5. 「学生相談活動における就労支援の取り組み」について

5.1 本学学生の現状

5.1.1 「特別な支援が必要な学生」について

表 2-1・2 の相談内容の件数 11 人に対して、「特別な支援が必要な学生」が 8 人いた。この学生の大半は、「就労支援」について、在学中に就職先を決めることが難しいかもしれない。これまでの相談活動では、保護者に来学してもらい、一緒に今後のことを話し合ってきたことである。筆者が訴えてきたことは、在学中から外部機関と連携して、雇用を獲得する道はないかと模索してきた。何人かの保護者には、5.2.1 の公的機関による支援の方法についてである。しかし、卒業後に具体的な動きが出てくるのであった。その理由として考えられるのは、「まだ時間がある。そのうち、動いてくれるだろう」「景気の動向から考えて、うちの子だけ決まらないのではなく、どの学生も苦戦していることから、急がなくてもいいのではないか？」というものである。結果的に、卒業後相談しに来るケースが多くなってきた。そこで、考えたのが外部機関との連携である。

5.2 外部機関との連携

5.2.1 公的機関による支援

文部科学省は、「学生の厳しい雇用情勢を受け、関係府省と連携しながら、大学のキャリアカウンセラーとハローワークのジョブサポーターとの連携の促進などにより、就職支援体制を強化している。また、教育課程内外にわたり就業力の育成を目指して各大学が行う取組などを総合的に支援している。」<sup>4)</sup>これを本学の学生対応に即してまとめていく。

以下の（１）～（３）は公的機関として、学生の就労支援をおこなっている。

(1) なら若者サポートステーション（通称：ならサポステ）（厚生労働省委託）

↓ 就職・進路相談、こころの相談 キャリア・心理カウンセリング

(2) ならジョブカフェ 正規雇用などをめざして就職活動をしているおおむね 35 歳未満（40 代前半までの不安

↓ 定就労者含む）の若者や学生がキャリアカウンセリング、セミナーなどの就業支援メニューを無料で利用できる

(3) ハローワーク 在学中の学生は就職課でのサポートがある。しかし、「新卒者・既卒者」については、厚生労働省（奈良労働局）が卒業後就職の決まっていない学生の就職を支援してジョブサポーターによる「奈良新卒応援ハローワーク」としておこなっている。具体的には、図5-1に示したように、ジョブサポーターの介入によって、学生のニーズと雇用者のマッチングを図って、3ヶ月の「トライアル雇用」によって、双方の合意が出来れば「期間の定めのない雇用」に移行することになる。

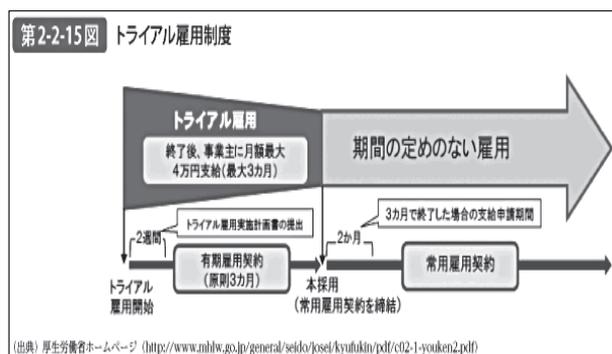


図5-1 トライアル雇用制度

具体的には、図5-1に示したように、ジョブサポーターの介入によって、学生のニーズと雇用者のマッチングを図って、3ヶ月の「トライアル雇用」によって、双方の合意が出来れば「期間の定めのない雇用」に移行することになる。

## 5.2.2 特定非営利団体による支援

### (1) 奈良県発達障害者支援センター「でいあ〜」

国の「発達障害者支援センター事業」に基づき、奈良県から社会福祉法人宝山寺福祉事業団に委託されて設立され、発達障害の人たちの支援窓口の拠点として、生涯にわたる支援システムの構築を目指している。

そこで、「でいあ〜」と接触を試みた。大西所長を含めて、4人の相談員が本学の学生支援センターを訪問された。種々、意見の交換をおこなった結果、大学側からは在學生（3年生）の保護者からの要望を伝えた上で、具体的なアドバイスを頂いた。一方、「でいあ〜」は、今後お互いに情報の交換を行いながら、学生の就労支援を他の諸機関と協力しながら進めていくことを確認した。

ここで考えておくべき事として、本学では、「特別な支援が必要な学生」という括りは、こと就労支援に関しては、「全学生が対象である」と考えた方が、より現実に即していると思われることである。今後、このことを声高に叫ぶ必要がある。

## 6. 「リメディアル教育」について

### 6.1 後期リメディアル自主勉強会の実施概要

12. 11. 2

- (1) 1, 2年生基礎科目の授業担当者から学生125名を選出して対象学生名簿を整理した。
  - 前期で退学・休学あるいは不登校の学生もいたので名簿からは省いた。
- (2) 履修登録後、空き時間を調べて勉強会計画を作成
  - 学生支援センターへ来た学生は運営委員と面談して自主勉強会の計画を作成した。
  - 対象学生のうち52名が来室して面談を受け、勉強会の登録をした学生が47名であった。
- (3) 9月23日（日）の保護者懇談会でアドバイザーが三者面談を行った
  - 学生支援センターへの結果報告は8件だけだったが、多数あるはずである。
- (4) 自主勉強会を開始
  - 10月よりリメディアル講師にも来てもらい本格的に実施している。

対象学生だけでなく、授業理解のために公民のWeb講座の受講。また、資格試験に向けて三角関数や方程式応用などを学ぶために自ら登録して、勉強に来ている学生もいる。

2012 年 10 月現在の登録曜日・時間と学生数 (学生名と学習内容等は別紙名簿参照)

	1 限	2 限	3 限	4 限	不定期
月		1 年 2 名	1 年 5 名 2 年 3 名	1 年 4 名	2 年 1 名
火	1 年 1 名 2 年 1 名	1 年 1 名	1 年 1 名 3 年 1 名	1 年 3 名 2 年 1 名	
水	1 年 1 名	1 年 2 名	1 年 5 名 2 年 1 名	2 年 1 名	
木		2 年 6 名	1 年 2 名 2 年 2 名	2 年 1 名	
金		1 年 3 名	1 年 8 名		

6.2 平成 24 年度 リメディアル教育総括会議 (学生支援センター) 13. 1. 31

1. 参加者 (講師：清水、今西、岡田、大田) (教職員：杵崎、竹田、金田、武谷、菅、岡本)
2. 来年度に向けての課題などの検討 ・改良すべき点や提案事項などの内容
  - ①リメディアルに参加していた学生は、みんな真面目であった
  - ②きちんと学習会に参加した学生に対して、なんらかのメリットを与えることはできないだろうか？ (たとえば勉強会 1 回参加でポイントを与え、そのポイント数に応じて成績面で優遇してやることはできないだろうか) 文科省の考えでは、リメディアル教育では単位を出すことはできない。単位を出すのならば、正式のカリキュラムに入れなければならない。単位や成績以外で、学生がメリットを感じるようなことはできないか。
  - ③指導する内容は小学、中学の復習だが、学生の年齢を考えて、言葉遣いや接し方でプライドを傷つけないような注意が必要であった。使用した教材は適切であった。
  - ④「公文式」教材をリメディアル教材として使っている大学もあると聞すが、どうだろうか。「公文式」をやらせていくには、時間が全く足りない。学生によって理解力の差が大きい
  - ⑤前期に就職をめざして自主的に勉強に来ていた 4 年生は非常に熱心であった。成績面の不振からリメディアルに参加している学生たちにとって、ここで勉強していることが単に試験で合格するというためだけでなく、将来の就職試験対策にもつながっていているのだという認識を持ってもらえばもっと効果があったのかもしれない。
  - ⑥リメディアル教育の目的は何なのか、将来の就職に役立つということも含めて、はっきりと学生に明示した方がよい。目に見えるメリットを示してあげたい
  - ⑦これまで「やってもできない、わからない」という意識をずっと持ち続けている学生たちに、「やったらできる」という自信をつけさせてあげたい。
  - ⑧学生たちはすぐに忘れるので、週に 1 回の勉強会では教えた内容が十分に定着しない。また、文字を書いたり計算することが雑という癖がついてしまっており、よく間違える。
  - ⑨文章を書くことを教える以前に、「何を感じ、何を考えているのか」という内容をもっていないので文章が書けない。
  - ⑩留学生に日本語を教えるとともに、持っている悩みを聞いてやった。このことで話すことの指導をした。これは 1 対 1 でないとできない。
  - ⑪リメディアル教育は、「この大学は丁寧に学生に対応して力を伸ばしてくれている」ということで外部に対して広報するアピールポイントとなるだろう。学生を送り出した高校に対しては大きなアピールポイントとなるが、リメディアルの内容 (レベル) の低さなど、外部に対するアピールポイントにするのは難しいところもある。

- ⑫これまでリメディアル教育に参加してきた学生たちが、就職段階で力を発揮して就職できたという実績を作ることが、リメディアル教育への強い動機付けとなるであろう。
- ⑬指導中にアドバイザーの先生が見に来てくれたことが学生にとって非常に励みになった。自主勉強会で学習している姿を先生に見てもらうことが大事である。
- ⑭非常におとなしく、冗談も言えない学生や分からないことを聞くこともできず、じっと止まってしまっている学生がいる。分からないところより先の問題はもっと難しくなるということを今まで教えられているからそれより先に進めなく止まっている場合もある。
- ⑮それぞれの学生の教材が違うので、同時に2人ぐらゐを教えるのが精一杯である。担当する講師の数が足りないとき、TAとして、先輩の学生を使って指導の補助をさせることはできないだろうか。TAもバイト代をもらえるので励みになるのでは？ また、このTAとして学力の高い留学生を使えば、留学生にとっても日本語の練習になるのではないかと思われる。
- ⑯学生支援センターが、リメディアルで勉強する場所だけでなく、就職準備や授業等で分からないことがあれば、それを教えてくれる先生がいて、勉強できる場所であるということが、学生たちに定着して行くことが望ましい。

## 7. 今後の課題

4年前、学生相談活動を始めた当初は、筆者のそれまでのフィールドが高等学校であったため、人間関係を中心とした、神経症的な相談内容を予想していた。しかし、年を追うごとに、その内容の淵源は「発達障がい」に起因していることを思い知らされた。それは相談内容を詳しく見ていくと実感できる。10年ほど前、盛んに特別支援教育に関する話題が多くなってきたことが思い出される。学生相談の内容として「発達障がい」が多数を占めていることは、驚くにはあたらないということが予見できたはずである。今後は、校舎のバリアフリー化、障害学生への心理サポートの充実を図ることが望まれる。

さて、6.「リメディアル教育」は、その延長線上にあり、学生支援センターの重要な業務となってきた。これはひとえに、大学当局の英断で、学生支援センターの設置とリメディアル教育を推進すべく、予算化して頂いた事による。その意味で、6.2の講師先生方の総括会議内容を掲載できたことは、次への一里塚となった。やっと、他大学並みの成果を上げる基礎ができた。次は、内容の充実に力を注ぐ必要がある。

次に、5.「就労支援」の取り組みである。外部機関との連携を模索してきた一年であった。「でいあ〜」との情報交換によって、学生・保護者へ案内できる、就労支援の糸口が見つかった。しかし、卒業生に対してのサポートと在学学生に対してのサポートは別物であることを肝に銘じておかなければならない。できる限り、外部機関との連携サポートによる成果を挙げていけるように努力したい。

次に、4.「学生支援組織構築の目的」では、図4-1「気になる学生」に関する情報収集と集約系統図のように、運用ができる組織ができたことは、喜ばしい。今後は、どのように活用していくかの工夫が重要となる。始まったばかりである。

結びとして、3.「学生教育相談研修会」を取り上げる。題材を考えることが大変だったが、研修会等で得た新しい知見を教職員の方々に知らせることで、自分自身もやるべき事が分かっていく側面を感じたので、今後も続けていくつもりである。

<註・参考文献>

- 1) 菅 徹, 2012, 小規模大学における学生支援の試み（３）－奈良産業大学学生相談室の活動（平成 23 年度）から－  
奈良産業大学紀要 第 28 集, Vol.28,pp173-182,
- 2) 日本学生支援機構 2007 「大学における学生相談体制の充実方策について －『総合的な学生支援』と『専門的な学生相談』の『連携・協働』－」
- 3) 菅 徹, 2013, 小規模大学における学生支援の試み －奈良産業大学学生相談室 4 年間（2009～2012）の活動－  
奈良産業大学情報学フォーラム紀要・第 8 巻, Vol.8,pp45-52,
- 4) 平成 25 年版 子ども・若者白書（全体版） 第 2 部 子ども・若者育成支援施策の実施状況 第 4 節 若者の職業的自立、就労等支援

A trial of assisting students who need support and advice in a small-scale university（４）

－ Activity of counseling room in Nara Sangyo University（2012）－